

# 中世後半イングランド南西部における 毛織物工業の発展

出 羽 秀 明

The Woollen Industry of South-West England during the Later Middle Ages

Hideaki Dewa

(一)

イングランドは概ね15世紀半ばに原材料である羊毛輸出国から製品の毛織物—厳密には半製品である未染色・未仕上げの白地広幅毛織物—輸出国に転換した。毛織物輸出量が羊毛のように毎年記録されるようになったのは、外国人と同様にイングランド人にも関税が課せられるようになった1347年からであるが、この時期にイングランドは依然として圧倒的に原材料輸出国であり、通常毎年3万 sacks を超える羊毛を海外に船載していた。それは14世紀末まで続き、1347年の Michaelmas から1348年の Michaelmas の間に記録された毛織物輸出量は、黒死病流行の直前であったとはいえたった4,422 cloths のみであった<sup>1)</sup>。黒死病流行の後、数年間減少を示した羊毛輸出量はほぼ以前の水準にまで回復したが、同時に毛織物輸出量も著しい増大を示した。1366—68年にはおよそ3,700 sacks の羊毛に相当する年平均ほぼ1万6,000 cloths に達した。60年代末から輸出量は減少したが、世紀の終わりまでに毛織物輸出量はほぼ1347—48年の10倍に増大した。1392—95年の間の平均は、おそらく1万 sacks の羊毛に相当するほぼ4万3,000 cloths であった。他方、羊毛輸出量は平均1万3,000 sacks に低下した。その後、この毛織物輸出の急激な拡大は維持されなかったが、15世紀半ばまでに毛織物の年平均輸出量は1万2,500 sacks の羊毛に相当する5万4,000 cloths にまで増大した。それに対して羊毛輸出量はほぼ8,000 sacks に減少していた。イングランドはまさにこの時期に原材料輸出国から製品輸出国への転換を遂げた。その後、毛織物輸出量は増大を続け、Edward IV 世の治世の終わりまでに平均6万3,000 cloths に、そしてテューダー朝に入り Henry VIII 世の治世の初めには8万4,000 cloths に、16世紀半ばまでには12万2,000 cloths に達した。

この15世紀後半からの貿易構成の転換期において、London による貿易支配の進展は極めて著しかった。1400—1年にはイングランドの全毛織物輸出量の14.7%にあたる3,407 cloths を

輸出していたのみであったが、1460—1年には56.1%にあたる17,272 clothsを、さらに1520—1年には71.0%にあたる53,653 clothsを輸出するに至った。こうしたLondonの急成長は、Brugesに代わり北欧商業の中心地となったAntwerpとの結びつき、いわゆる「ロンドン＝アントワープ枢軸」の形成によるものであった。Londonを通じて輸出された毛織物の太宗は未仕上広幅織物であり、その供給地はWiltshireなど南西部諸州が中心であった。この地域は、17世紀半ばに至り南欧市場向けの東部産新毛織物New Draperiesにその地位を奪われるまで、イングランドの貿易構成の転換において最も重要な役割を担った。Gloucestershire, Wiltshire, Somersetなど南西部の毛織物工業は15・6世紀にその絶頂期を迎え、15世紀後半には3州とも年3,000反以上、イングランドの全毛織物生産量の半分を産出した。Cotswolds及びMendipsに発する河川の峡谷沿いの、北はWitney及びPainswickから南のShepton Mallet, Warminsterに至るこの地域では上質の広幅織物が主として生産された。‘Stroudwaters’, ‘Cotswolds’, ‘Castlecombes’, そして‘Westerns’はかつての‘Lincoln scarlets’に匹敵する名声を大陸で得ていた。

本論は、こうしたイングランドの原材料輸出国から製品輸出国への転換において、その製品供給面から中心的役割を担ったイングランド南西部における毛織物工業の発展を、「特権的都市から農村への中心移動」を視野に入れつつ跡づけたものである<sup>2)</sup>。

- 1) E. M. Carus-Wilson and O. Coleman, *England's Export Trade, 1275-1547*, Oxford, 1963 毛織物輸出に対しては、既に1303年に外国商人にのみ1 cloth 当たり1 s. の関税が課せられていた。その後、1347年に2 s. 9 d. に引き上げられ、同時に国内商人に対しても1 s. 2 d. の関税が課せられるようになった。H. Rothwell, *English Historical Documents, 1189-1327*, p. 517, London, 1975
- 2) 例えば、E. M. Carus-Wilson, *An Industrial Revolution of the Thirteenth Century*, *Econ. H. R.*, vol. XI, no. 1, 1941, E. Miller, *The Fortunes of the English Textile Industry in the Thirteenth Century*, *Econ. H. R.*, 2nd ser., vol. XVIII, no. 1, 1965

## (二)

イングランドの毛織物工業は、既に12世紀から13世紀にかけて国内のいたるところで発展しつつあり、毛織物の製造・販売が家庭の副業としてではなく専門の職人の手によって営まれていた。とりわけExeter, Lincoln, York, Leicester, Winchester, Northampton, Oxford, Londonなどの特権都市における発展は著しく、Beverly, Lincoln, Stamford, Northamptonなどでは上質の、York, Leicesterなどではやや安価な、そしてLondon, Oxford, Winchester, Colchesterなどではさらに安価なrussets, burelsといった毛織物が製造された。Henry I世とHenry II世の時代にはLondonをはじめOxford, York, Lincoln, Winchester, Nottingham, Huntingdonなどの都市では織布工のギルドが形成され、国王Johnの治世の1202年にはNottingham, Stamford, Beverly,

Lincoln を含む多数の都市が、「Henry II 世の時代に行われていた慣習に従って、染色済み毛織物を売買する」権利を国王から買収した。Lincoln では1131年に、York では1164年に織布工ギルドを組織していたし、London のそれは少なくとも12世紀初めに国王の特許状によって設立された。Stamford では1182年に織布工や染色工が記され、その毛織物 'stamforts' の名は大陸で広く知られていた。Stamford と Lincoln の緋色に染められた高価な毛織物は国王の衣裳管理部の、そして外国の支配者への贈り物として高い需要があった。Winchester も12・3世紀にはイングランドで主要な毛織物生産地の1つに数えられ、'burel' の名で知られた安価な大衆向けの製品を生産していた。Henry II 世は1171-2年に Winchester から2,000 ells の burels を Ireland に送った。Winchester の織布工と縮絨工は、Henry I 世の時代以後それぞれギルドを組織し、国王にそれぞれ年 £6 の上納金を支払っていた<sup>1)</sup>。

1197年に Richard I 世によって定められた度量衡法「The Assize of Measures」は、この時期の都市毛織物工業の発展に対する政府の関心の深さを示すものであり、そこには「黒色のものを除いて、市 (cities) あるいは主要都市 (chief boroughs) 以外の国内のいかなるところにおいても生産してはならないこと。」との規定があった<sup>2)</sup>。

この時期には、こうした特権都市のみならず農村地域においても古くから農家の副業として営まれていた毛織物製造業が緩慢にせよ成長しつつあった。イングランド北部の Yorkshire では York をはじめ Beverly, Scardeborough などの諸都市とともに West Riding の Wakefield, Halifax, Bradford などで、また Gloucestershire, Somersetshire, Wiltshire, Hampshire などイングランド南西部諸州の農村地域でも毛織物工業が拡散しつつあった。

イングランドの毛織物生産地域の中で、中世後半の輸出拡大において重要な役割を担うことになった Gloucestershire には、州都 Gloucester をはじめとして Cirencester, Tetbury, Marshfield, Minchinhampton, Fairford など州の各地に毛織物生産によって繁栄した極めて多くの都市や町・村落が拡散していた。

古代ローマ時代に 'Coloniae Glevum' と呼ばれ、4大コロニアの1つであった Gloucester は、1155年に Henry II 世から London, Winchester の市民と同じ慣習と特権の享受を追認した勅許状を付与され、その後1194年に Richard I 世によって国王の地代収入、裁判収入の徴収を住民が請け負う都市収入徴収請負権を賦与された<sup>3)</sup>。Gloucester では早くに織布工のギルドを持ち、聖女 Anne を守護聖人として友愛団体を組織していた。12世紀終りから13世紀初め、イングランドの他の地域がまだ主として外国産の毛織物を身に着けていた時期に、既に Gloucester では縮絨工、染色工、織布工はありふれた名前であった。1304年には6月23日からの7日間に歳市を開催する特許状が付与され、この歳市を通じて都市にもたらされた羊毛や大青に課せられた市場税は、この時期に Gloucester の職人にとってこれらの商品が不可欠なものであったことを示している<sup>4)</sup>。

12・3世紀の Gloucestershire における毛織物工業の進展は、Cotswolds の村々に設置された

多くの縮絨水車、一群の織布工、染色工、縮絨工らの存在にその痕跡を認めることができる。縮絨水車は12世紀後半にイングランドに導入され、13世紀には聖・俗領主の主導のもとに広範に分布した。Cotswoldsの丘陵を下る河川は水車に必要な動力を提供し、1175年に Temple Guiting に付属する一散村である Barton に聖堂騎士団によって縮絨水車が建設されてから次第にその数を増し、13世紀末には20基を越えていた。1206年に Evesham の修道士は Windrush 川沿いの Bourton-on-the-Water に縮絨水車を所有した。Isbourne 川の峡谷にある城壁に囲まれた古い町 Winchcombe には Domesday の時代に5台の水車があった。7月28日に開かれた St. Kenelm's の歳市は Winchcomb で毛織物や他の商品を購入する大きな機会であり、1254年に Abingdon の修道院長はこの歳市に毛織物を供給した。Northleach の南西4.5マイルの Chedworth の慣習農は1298年に1台の縮絨水車を保有し、9月29日の聖ミカエル祭もしくは8月15日の聖母被昇天祭に 2 s. 7 1/4d. の賃貸料を納めた。

Cotswolds 南西部に広がる Stroud 峡谷沿いの地域は、深い谷底を流れる Frome 川の水流を利用して毛織物工業の発展を見た。From 川南岸の急坂の上にある台地には広々とした草原が広がり、この台地の中央に Minchinhampton は位置していた。Minchinhampton には耕作農民や小屋住農が住んでおり、13世紀には羊毛やチーズが定期的に Cirencester に運ばれ、そこから Thames 河を下る駁に積むため Henley に送られていた<sup>5)</sup>。既に Domesday の時代にここには少なくとも8台の水車があった。1300年には Stroud 峡谷沿いの Colcombe, Wymberley, Brimscombe, Brechcombe に4台と Chalford に2台の計6台が、そして Nailworth 峡谷に沿った Longford, Nailworth に少なくとも2台があった。Brimscomb では少なくとも13世紀後半に1台の水車が縮絨水車として使われていた<sup>6)</sup>。Minchinhampton マナーの一部であった Rodborough には、1272年に Robert the Weaver (le Wyffer), William the Weaver (Textor), Roger the Fuller が、そして数年後に John the Fuller, Adam the Dyer がいた。

Cotswolds の中心都市であった Cirencester でも早くに毛織物工業が確立され、12世紀には Ralph the Weaver, Henry the Dobber (Dyer), Norman the Fell-monger といった名前が都市の記録に頻繁にみられ、Cheaping Street は 'Dyers' Street' として知られるようになっていた。Cirencester の織布工は、既に Henry II 世から特許状を付与されていたと言われ、Henry IV 世の治世までにその友愛団体は極めて重要な地位を占め、貧しい成員のための施療院を持った。また、Hawkesbury にも1270年に縮絨水車があり、住民は彼らの毛織物を領主の水車以外で縮絨することが禁止され、違反には罰金が課せられた。しかし彼らは領主の水車ではなく他の場所で毛織物を縮絨する許可を得るために料金を支払っていた。ここには何人かの織布工の他に染色工が一人存在した。Cotswolds の村々は、原料羊毛をその地域で豊富に入手することができたし、縮絨用土 fuller's earth の入手も容易であった。Cirencester, Tetbury, Castle Combe といった Cotswolds の村々において開かれた市場では上質の羊毛が提供された。

Wiltshire における水力による縮絨は Marlborough Downs を東西に横切る Kennet 川に沿っ

た Kennet 峡谷, Cotswolds に源を發して Severn 河口に通じる Avon 川に沿った Bradford-on-Avon, そして広大な Salisbury Plain を南北に横切って流れる Avon 川の周辺で行われていた。イングランドの最初の縮絨水車は Calne 近くの Stanley の Cistercian 修道院に所属するもので、1189年に修道院の所有を認めた Richard I 世の特許状において言及された。続く世紀の間にこれらの3つの地域における縮絨水車の数は増大していた<sup>7)</sup>

Wiltshire 北西, Gloucestershire との州境に位置し、15世紀半ばには主要な毛織物生産地となった Castle Combe は、1340年でも僅か55人ほどの住民がいる人里離れた一集落にすぎなかった。そこには4台の水車があったが、その内の3台は穀物用で1台のみが縮絨用であった。14世紀にはわずか数人の織布工がいたのみで、世紀半ばには城の廢墟以外、その名のように「険しい谷」があるだけであった。

かつて 'Old Sarum' と呼ばれ、ローマ道路の重要な結節点として栄えた Salisbury は、宗教上の中心地であるとともに地方生活の中で重要な役割を果たした。週市と歳市が開かれ、南部農村地帯の市場都市として活気に満ちた商取引の中心地でもあった。既に Domesday Book には織布工、縮絨工、染色工、毛織物商が頻繁に記され、市内や周辺のあちこちに布張場 racks, tenters があったことが示されていた。ここでは Edward III 世の治世に毛織物工業が発展した。しかし、Salisbury の繁栄の基礎となった商品は都市周辺に広がる平原に放牧された夥しい数の羊から得られた羊毛であった。Marlborough Downs の中央に位置する Marlborough では12世紀末に burels を生産しており、13世紀初めには郊外に縮絨水車が設置されていた。その近傍の Kennet 川の南部に展開する Kinwardston のハンドレッドにある Chilton Foliat には1307年に縮絨水車があった<sup>8)</sup>。15世紀の終りに重要な毛織物製造と市場中心地となった Devizes には、毛織物製造に携わる職人やそれを扱う商人がおり、その近傍には縮絨水車があった。1281年に bailiff を勤めた染色工がいた。その他、13世紀終りに Stanley-on-the-Marden, Downton, Wylve 峡谷沿いの Steeple Langford, 1300年に Avon 川上流の Chippenham, Mere に縮絨水車が設置されていた。溪谷における縮絨水車の建設にもかかわらず、14世紀初めまで Wiltshire は毛織物よりはその原料である羊毛でより広く知られていた。州の2/3は北部の Marlborough Downs, 東南部の Salisbury Plain などの石灰質の高地によって形成され、ダウンズと呼ばれるその丘陵には羊の飼育に必要な草が豊富にあった。羊毛は Salisbury の羊毛商やイタリア商人によって Southampton, Lymington, Poole の港からイタリアや Flanders に輸出された。そして、海外から上質の毛織物がもたらされた。Wiltshire の各地方では確かに織布工が見いだされたが、彼らは主にその地域の需要を満たしていたに過ぎなかった。その時期、毛織物製造に従事する職人の集中も、Wiltshire の毛織物が輸出された証拠もなかった。

Somersetshire の東部は峨々たる峡谷によって無数に深く切り込まれた石灰質の丘陵 Mendip Hills が Wiltshire の白亜の高地帯へと続き、中央部には穏やかな起伏と緑に覆われた平原が広がっていた。この中央平原は肥沃な草原によって占められ、牧草地では夥しい数の羊の放牧が

行われていた。中世、羊毛は York, Lincoln, Kent, Norfolk の各州をはじめ Buckingham, Bedford, Rutland, Derby, Hertford, Hereford, Shalop の各州で生産されていた。Somerset ではこれらの州よりも多量の羊毛が生産されており、品質も優れていた。1337年、Somerset の羊毛価格は 1 sacks 当り 9 marks で 12 marks の Hereford には及ばなかったが、その他の Wilt, Rutland, Dorset 各州の 7 - 7 1/2 marks, 及び北部 4 州の平均 5 marks よりも高価であった。<sup>9)</sup>

Somersetshire では古くから粗質の毛織物である 'cary cloth' の製造が農村の人々のなかで普及していた。Dunster では 1259 年に縮絨水車の賃貸料が支払われ、1266 年には Adam the Dyer, Walter the Webber, William the Fuller, Alice the Webber, Christina the Webber らが言及された。そして Sutton にも縮絨水車があり、Gloucestershire との州境に位置する Axbridge では Webbe 姓の者が見いだされた。<sup>10)</sup> また、Cheddar では 1301 年に 4 台の縮絨水車の賃貸料として 16s. 11 1/2d. が支払われた。Wells には Edward II 世の治世に Fuller's Street があり、Richard はそこに住む縮絨工の一人であった。Cotswolds の南西端に位置する Bath は Fosse 街道が Avon 河と交わる地点に建設された古代ローマ都市の一つで、「Aquae Sulis」と呼ばれた温泉都市であった。ここでの毛織物業の発展は 14 世紀にベネディクト派の僧侶によって技術がもたらされたことにはじまった。寺院の紋章の図柄には機織りの杼が取り入れられた。Bath の周辺には羊を飼うのに絶好な草地が広がり、羊毛を漂白するための白土が丘陵地に豊富にあった。そして Avon 河は水と動力を供給した。修道院長の Thomas は 14 世紀初めに Marlborough の商人 John Godhyn から 300 sacks の羊毛を、そして修道院長の Walter は Devizes の商人 Henry から若干の羊毛を購入した。<sup>11)</sup> 1340 年の人頭税徴収者の中に Richard le Deyare, Henry le Webbere, Thomas le Touker, Ralph le Taylour, Walter le Lindraper, Nicholas le Chaloner といった名前が見られた。<sup>12)</sup> 14 世紀に G. Chaucer はその著書「カンタベリー物語」Canterbury Tales において Bath 近くに住む旅慣れた機織り女を登場させ、彼女について「機織りが巧みなことは Ypres や Gaunt の人より上だった。」と記した。

- 1) A. E. Bland, P. A. Brown, and R. H. Tawney, English Economic History Select Documents, pp. 114-6, 1914, London, Derek Keene, Survey of Medieval Winchester, Oxford, 1985, V. C. H., Hampshire, vol. V, p. 477, 1912, V. C. H., Oxfordshire, vol. II, p. 242, 1907
- 2) A. E. Bland, P. A. Brown, and R. H. Tawney, op. cit., pp. 154, 155
- 3) C. Gross, The Gild Merchant, vol. II, pp. 373-4, 1890, Oxford
- 4) V. C. H., Gloucesters., vol. II, p. 54, 1907
- 5) C. E. Watson, The Minchinhampton Custumal and its Place in the Story of Manor, Trans. of the Bristol and Gloucestershire Archaeological Society, vol. LIV, p. 203 ff, 1932
- 6) C. E. Watson, ibid., p. 295, E. M. Carus-Wilson, The English Cloth Industry in the Late Twelfth and Early Thirteenth Centuries, Eco. H. R., vol. XIV, 1944
- 7) V. C. H., Wilts., vol. IV, p. 119
- 8) E. M. Carus-Wilson, An Industrial Revolution of the Thirteenth Century, Econ. H. R., vol. XI, no. 1,

1941, in: do, Medieval Merchant Venturers, 1954, p. 196

9) V. C. H., Somersets., vol. II, p. 407

10) V. C. H., Somersets., vol. II, p. 406

11) W. Hunt, Two Chartularies of the Priory of St. Peter at Bath, Som. Rec. Soc., vol. vii, pp. 84, 143, 1893

12) V. C. H., Somersets., vol. II, p. 407

### (三)

13世紀末から14世紀初めにかけてこうした旧来の都市毛織物工業は危機の、そして転換の時代を迎えた。良質の染色済み広幅織物がフランドル毛織物工業の進出を前にして、国際市場から次第に排除され始め、これに伴って毛織物工業の中心地であった東部諸都市を始めとする都市工業は衰え始めていた。イングランドの毛織物工業の発展は Flanders のそれに比べ著しい遅れをとっていた。Ypres や Ghent に比べてイングランドの都市の毛織物工業は極めて小規模なものであった。イングランドにおける毛織物生産は無視することはできなかったが、先述のようにこの時期には今だ多量の羊毛を Flanders やイタリアに供給する原材料輸出国であり、同時にかかなりの量の外国産毛織物の需要国でもあった。

この時期に都市毛織物工業の多くが衰退し始めていたことは明白であった。York の市民登録簿に記載された市民加入者のうち、1311年から1331年の20年間に織布工はたった3人であり、織布工ギルドによる年 £10 の上納金の支払いは、「York や他の都市以外のあちこちの農村の人々が毛織物を染色、縮絨している」ので13世紀の間に滞っていた<sup>1)</sup>。Winchester ではEdward I世の時代までに、「多くの毛織物製造工が都市を離れたため」、次第に上納金の徴収が困難な状態になりつつあった。Lincoln でも「Henry II世がギルド設立の特許状を付与した時には織布工の数は200人を越えていたのに、1321年から1331年の間には織布工がいなくなり、その後1345年まで極めて僅かしかない。」と述べられた<sup>2)</sup>。

これら王立都市 (royal borough) 以外の都市でも毛織物工業の衰退は著しかった。Northampton では、Henry III世の時代には300人にのぼる毛織物製造工が働いていたが、1334年には、「今や彼らが住んでいた家は崩れ落ちてしまっている。」と不満が述べられた。ここの織布工や染色工は過重な税負担を免れるために都市を離れた。また、Leicester では1322年にたった1人の縮絨工が残るのみで、しかも彼は貧困に陥っているとされた<sup>3)</sup>。

こうした都市毛織物工業の不振に対して政府は無関心ではなく、羊毛輸出の禁止、国内産毛織物の着用の奨励、外国産毛織物の購入の禁止、Flanders の毛織物職人の来住を奨励するなど積極的に保護・振興政策を実施した。1326年 Edward II世の治世に定められたステープル条例 Ordinances of the Staple では、毛織物工業に従事する人々を奨励するために、要求があった場合にはいつでも縮絨工、織布工、染色工、その他主として毛織物の製造によって生計を立

てている職人に対して適当な特権を与えることが約束された<sup>4)</sup>。さらに、Edward III 世の時代に入り、1332年には2年間を限って輸入毛織物の使用禁止令が、1337年には外国製毛織物の輸入禁止、及び羊毛の輸出禁止令が出され、併せて外国人の熟練職人の移住が奨励された。

Flanders の毛織物中心地から、多くの織布工を初めとして縮絨工、染色工ら毛織物職人がその雇い職人や徒弟らと共に移住した<sup>5)</sup>。1336年から1366年の30年間に York だけで30人を越え、Henry Market, Peter van Uppestall は都市の要職に就く程に富裕になった<sup>7)</sup>。彼らの移住はイングランドの毛織物工業の進展の原因というよりはむしろ進歩の前兆として重要性をもつものであった<sup>6)</sup>。

こうした旧来の都市工業が衰退した根本的な原因は、農村地域における縮絨水車の普及にあった。縮絨水車の立地は都市におけるよりも農村において有利であったので、縮絨工程が次第に都市の郊外、時には遠方の上流の谷間において行われるようになった。それに伴って織布工や染色工らが縮絨水車の周辺に定住し始めた。農村では都市におけるようなギルド的制約から自由であったし、高額の財政的負担を免れることができた。また、安価で豊富な労働力を入手し得た。こうしてイングランドの毛織物工業の中心は旧来の特権的都市から北部の West Riding, Lake District, Wales の南部辺境地帯、西部の Cotswolds, Mendips, そして Wiltshire と Berkshire の丘陵地帯の峡谷、さらに Devonshire, Cornwall などの農村地帯に次第に移動しつつあった。これらの地域は縮絨に必要な水流に恵まれていたのみならず、上質羊毛の産地であり、染色のための清流も豊富であった。

こうした農村工業の発展に対して多くの都市は郊外の水車への毛織物の送付を制限し、また市壁外の職人の雇用を制限するなどの方策をとることによって基本的に市壁内に工業を限定し、都市の繁栄と富を維持すべく市条例 (civic ordinances) を繰り返し制定した。例えば、Bristol では当初、正規の寸法を確める市当局者による検査を条件に農村地域での織布を認めていたが、1381年には撤回した<sup>7)</sup>。Winchester では、既に13世紀に都市外での burels の製造を禁止していたが、1402年に都市の毛織物製造工が市外の縮絨工、もしくは織布工を雇うことを禁止した。また、若干の都市は国王に毛織物製造の独占を確保するための援助を求めた。York の市民は、「1164年の特許状が毛織物の製造を York 並びに同州の都市にのみ制限しているにもかかわらず、今や同州のそれ以外の各地の人々が毛織物を染色し、仕上げている。」として1304年に国王に請願した。こうした施策にもかかわらず発展しつつある農村工業を抑制することはできなかった。しかし、こうして14世紀後半から本格的に展開した農村の毛織物工業は、主要都市の貿易活動の基盤として、今だそれらを脅かすものではなかったし、熟練を要する仕上げ、染色工程、さらに輸出貿易は都市に依存せざるを得なかった。

その後、14世紀後半から15世紀半ばにかけての時期に都市、とりわけ大都市の興隆が見られた。Salisbury, Reading, Southampton, Bristol は黄金時代を迎え、York, Norwich, Boston, King's Lynn が黒死病の打撃から回復した。Bristol は市内及び Stroud 峡谷の毛織物をフランスやイベ



リア半島に大量に輸出する貿易港として繁栄した。Southampton はSalisbury などの毛織物をイタリアのガレー船で地中海方面に、Hull はYork, そして高級な 'Beverley blue' の製造で国内・外に有名であった Beverley の毛織物を北海, バルト海方面に輸出することで繁栄した。しかし, 15世紀半ばからの毛織物輸出の増大は14世紀後半から本格的に展開し始めていた農村の毛織物工業の成長を促進し, こうした大都市の繁栄を脅かすに至った。明確に毛織物工業の新たな中心が確立され, 旧都市工業の没落は決定的となった。

新たな産業立地が完成し, 毛織物製造中心は北西部の Yorkshire の West Riding, 東部の East Anglia, そして南西部の Somerset, Gloucestershire, Wiltshire の三地域に形成された。15世紀中頃にこれら三地域の毛織物生産量はそれぞれ4,972, 8,645, 14,166 cloths で, イングランドの全生産量の13, 22, 36%を占めた<sup>8)</sup>。州別では Suffolk が1番目に, Somersetshire, Yorkshire, Gloucestershireがそれに続いた。Wiltshire は5番目に位置し, これら5つの州だけで粗布を除いた全毛織物生産量の3/5を占めた。

農村工業の興隆によって多くの都市が衰退した。地方の中心都市であった Norwich, York, Bristol, Coventry では毛織物工業が不振に陥り, 人口が減少した。Lincoln は Winchester とともに以前からの衰退が続いた。York 市民登録者のうち織布工は1350年から99年には273人に達していたが1450年から99年には124人に減少した。Coventry は15世紀中頃の貿易不況をきっかけに, やがて農村工業の競合, 圧迫を受けて衰退した<sup>9)</sup>。Southampton はLondon 商人による貿易の侵蝕によって衰退した<sup>10)</sup>。中規模都市の Gloucester, Shrewbery, Canterbury, 東部沿岸都市の Stamford, Boston, King's Lynn, Great Yarmouth, Beverley, Scarborough も相対的重要性を減少した。

15世紀の毛織物検査官の会計簿 Aulnage Accounts は, 代表的都市の名のもとにそれぞれ検印反数が示されている。この数字は必ずしもその都市のみの生産量を示すものではなく, その周辺地域の人々によってその都市で販売された反数を含んでいるが, この時期の都市から農村への毛織物工業の中心移動の趨勢を推測することができる。例えば, 1468年の Michaelmas から1469年の Michaelmas の Suffolk における会計簿によれば, 合計5,188 cloth のうち特権都市の Bury St. Edmonds と Ipswich はそれぞれ644, 522 cloth を占めるのみで, 残りはすべていわゆる農村都市であった。特に, Hadleigh, Lavenham の検印反数はそれぞれ1,707, 1,001 1/2 cloth にのぼった。もはや旧来の都市毛織物工業の没落と農村工業の優位は覆うべくもなかった<sup>11)</sup>。

1) H. Heaton, *The Yorkshire Woollen and Worsted Industries*, p. 29, Oxford, 1920

2) C. C. R., 1348–1350, p. 120

3) A. E. Brand, P. A. Brown, and R. H. Tawney, *op. cit.*, pp. 131, 133

4) C. P. R., 1324–1327, p. 269, 1327–1330, p. 98, A. E. Brand, P. A. Brown, and R. H. Tawney, *op.*

- cit., pp. 181–4
- 5) The Statutes of the Realm, i, p. 281
  - 6) F. Collins, Register of the Freemen of the City of York, vol. 1, pp. 30–65, Thomas Allen, A New and Complete History of the County of York, p. 176, 1828, London
  - 7) A. Raine, York Civic Record, vol. ii, pp. 165–6, F. Bickley, The Little Red Book of Bristol, vol. II, pp. 5, 7, 1900
  - 8) H. Heaton, op. cit., p. 85
  - 9) J. N. Bartlett, The Expansion and Decline of York in the Later Middle Ages, Eco. H. R., 2nd ser., vol. XII, pp. 26–29, 1959, C. Phythian–Adams, Desolution of a City, Coventry and Urban Crisis of the Late Middle Ages, pp. 40–50, Cambridge, 1979
  - 10) A. Ruddock, London Capitalism and the Decline of Southampton in the Early Tudor Period, Eco. H. R., vol. II, No. 1, pp. 138, 140–1, 1949
  - 11) E. M. Carus–Wilson, The Aulnage Accounts: a Criticism, Eco. H. R., vol. II, no. I, 1929

## (四)

イングランド南西部の毛織物工業は15・6世紀にその絶頂期を迎えていた。Gloucestershire の Cotswolds に散在し、旧くから毛織物工業が定着していた多くの小都市、町、村落、とりわけ Stroud 峡谷に沿った Stroud や Chalford は工業中心地に成長した。14世紀半ばでも一寒村にすぎなかった Wiltshire の Castle Comb では河川に沿ってほぼ70人の織布工、縮絨工、染色工が住んでいたといわれ、それぞれが使用人、徒弟を抱えていた。また、Cotswolds の丘陵地の南縁に沿って Wickwar, Dursley, Wotton–under–Edge, Bath, Trowbridge, Bradford–on–Avon, Cirencester, Malmesbury などの工業中心地が出現しつつあった。Avon 河の南、Somerset は 'Mendips' で有名であった。さらに西の Bridgewater, Taunton から Barnstaple, Tiverton, Exeter にかけて kerseys や他の安価な軽い毛織物の産地が伸びていた。

14世紀には片々たる小集落が散在していたにすぎなかった Stroud 渓谷沿いの地域は、中世後半にイングランドの毛織物工業の中心地に勃興した。15世紀末までに 'Stroudwaters' は 'Castlecombes' と共に、特に上質毛織物の商標名として国内・外で知られるようになっていた。中世後半の Stroudwater の成長は、1334年と1523年の臨時税賦課 (Lay Subsidy assessments) の比較によって描き出される。1334年と1523年にほとんど同額を支払った Lincolnshire や、1523年にほぼ14%多く支払った Norfolk に比べて、同年に62%多く支払った Gloucestershire は相対的重要性を増していた。その中で1524年に1334年の13倍の臨時税を支払った Bisley は、1334年に Bisley の6倍を支払った Cirencester を凌ぐまでに重要性を増していた。1523年に他の多くの村々にはほとんど賃金稼得者は記されていないが、Bisley においては251人の税支払者のうち112人は賃金稼得者であった。これは中世の最後の2世紀間に Stroud 渓谷地域の工業の進展が極めて著しかったことを示す。1545年の臨時税では Hampton には £5 の被課税資産を所有する住人が31人を数え、その内で職業を明らかにし得る者の中には、1人の織元、10人

の縮絨工，7人の羊毛生産農民，4人の織布工がいた。また，Rodboroughでは27人存在し，その中には5人の織元，7人の縮絨工，6人の羊飼い，6人の織布工が含まれた。Rodboroughは1524年の臨時税では1334年の5倍の金額を支払った。Hamptonの1戸当りの平均評価額は£11 4s. 6d.で，織元のThomas Davisの未亡人Joanは最高の£40を評価され，Rodboroughでは平均は£31 14s. 1d.で織元のWilliam Halydayが最高の£42を評価された<sup>1)</sup>。

Stroudwaterは工業の発展に必須の条件をすべて備えていた。15世紀にその生産量を増大し，多くの商人の地位を築いたCotswoldsの上質羊毛を潤沢に供給された。北のChipping Campdenから南西のBathまで延びるほぼ100マイルの丘陵のうねであるCotswoldsは“羊飼いの中の偉大な王様”と言われ，常にその羊で有名であった<sup>2)</sup>。Cotswolds南西の縁に位置するBeverstoneでは，既に13世紀に6,000頭の羊が飼育されていた。しかし，Cotswoldsで羊の飼育が栄えたのは15世紀になってからであり，Cotswoldsの羊毛商人たちはその富と信仰心の素晴らしい記念碑をNorthleachやChipping Campdenの教会に遺した。Edward IV世の時代の羊毛輸出商であるCely家の長男Richardは羊毛を仕入れにCotswoldsを訪れていた。1482年4月にNorthleachで羊毛仲買人のWilliam Midwyntterと取引し，さらにChipping Campdenでも羊毛を買い付けた。中世に羊毛取引の中心地として知られたNorthleachはOxfordとGloucesterを結ぶ街道の両側に沿った，Thames河支流のLeach川上流の谷間に建設された。1227年にHenry III世によって水曜日に開かれた週市と6月29日のSt. Peter and St. Paulの祝日の前後3日間開かれた歳市の開催を勅許され，以降羊毛や毛織物の取引を中心とする市場町として栄え15世紀に頂点に達した。16世紀に入り毛織物取引の中心がStroudの谷間に移動するとともにさびれるまでNorthleachの歳市は多くの羊毛商人で賑わった。NorthleachにはFortey, Midwinter, Busshe家など富裕な羊毛仲買商人が住んでいた。ここのSt. Peter and St. Pauls教会は彼らによって増・改築され，教会のそこかしこに彼らの記念碑が飾られた。Chipping Campdenでは1247年には週市と3日間の歳市が開催されていた。ChippingはMarketを意味した。これらの市場が羊毛の主要な集散地の1つとなったのは14世紀の間であった。羊毛商人であったWilliam Grevilの記念碑はSt. James's教会にあり，そこには「全イングランドの羊毛商人の華」と記された。彼の館はイングランドで最も美しい村道と言われるHigh Streetに14世紀末に建てられ，ゴシック風の門口と鏡板入りの張出窓で飾られた。

Stroud峡谷には縮絨用土fuller's earthの地層が両側の急斜面に沿って見いだされ，毛織物輸出のはけ口，そして輸入染料の供給源として好都合であったBristolの港はそう遠くはなかった。この地域の毛織物はしばしば海外で'Bristols'として知られた。そして，深い谷を形成したFrome川の水流は多くの縮絨用水車を動かすのに十分な量と，染色，特に赤色の染色に適した水質をもっていた。13世紀終りに9人の人々が縮絨用土を採掘するための地代を支払っており，この内の4人は'Fuller'の姓であった。この時代に姓はおそらく実際に携わった職業を示していた<sup>3)</sup>。

15世紀に入り Henry VI 世の治世の終りまでに Stroudwater は毛織物の縮絨、染色、仕上げの中心地として有名になっていた。Longford, Walbridge, Chalford などの縮絨水車は、時にこれらのマナー以外の織元たちの仕事を委託された。Cirencester の John Stoby は、'Strode' の John Huckvale, Robert Kyn, William Haliday ら 6 人の縮絨工にそれぞれが長さ 24 ヤードで幅 1 3/4 ヤードの 36 broad cloths を送り洗淨、縮絨、染色を委託した。それらは 3 週間で仕上げられ、彼の家までの 8 マイルを駄馬で運ばれた。1459 年 7 月に Cirencester で毛織物検査官 Aulnager によって 'the colour called Bristol red' の Stoby の大量の毛織物の積送品が差し押さえられた<sup>4)</sup>。縮絨工の中には富裕な者もいたが、必ずしも彼ら自らが毛織物製造のすべての工程に従事していたとは限らなかった。縮絨や染色、そして起毛、剪毛の仕上げ工程に専業する傾向にあった。これらの Stroudwater の水車所有者に織元 (clothier, clothmaker) という言葉が次第に当てはめられるようになった。1476 年に John Grymer, 'late of Rodborough, touker' は、又は 'of Strouwater, clothman' として、Edmund Benet は 'Stroudwater, clothmaker' として記述された<sup>5)</sup>。Cirencester の織元たちの中には John Benet のように Stroud 溪谷で自分自身の水車と染色小屋を所有した者もいた。Chalford の縮絨水車は Richard III 世の治世には 16s. であったが、1515 年にその縮絨水車は年 £3 6s. 8d. にも上る額で賃貸された<sup>6)</sup>。Stroud の南西 10 マイルの Dursley は 15 世紀までに Cotswolds の最も重要な羊毛と毛織物都市の一つとなっており、多くの Flemish 織布工が移住した。John Cukesun はこの織元であった<sup>7)</sup>。

Stroud 溪谷での毛織物製造業の著しい成長がみられた時期から、かつて羊毛やチーズを積んだ荷馬車が往来していた Cirencester への、そしてそこから London に至る道路に沿って、毛織物市場の Blackwell Hall で販売するために毛織物を積んだ荷馬車が行き交った。15 世紀終りから 16 世紀初めにかけてイングランドの毛織物輸出の増大において Stroud water が極めて重要な役割を担ったことは疑い得ない。Cirencester では年 2 回の歳市と週 2 回の週市が開催された。歳市の開催は、すでに国王 John, そして Henry III 世によって認められていた。週市は初期には日曜日の午後 3 時に開かれ月曜日まで続けられた。住民は市場税 toll の支払いを免除された。14 世紀にこの市場には馬、羊、豆類、生・塩漬けの鮭、鱈、うなぎ、鯿などの干し魚、木材や石炭などの燃料、塩、獣脂、オイル、麻布、アイルランド製織物、鉄、錫、銅、鉛などの鉱物といった多様な商品がもたらされた<sup>8)</sup>。Cirencester は 14 世紀の終りまでに毛織物取り引きにおいてその地位を認められており、15 世紀には毛織物製造は都市の主たる産業となっていた。周辺の Chalford, Bisley, Ampney, Easeleach には縮絨水車があり、Green cloth, Red cloth, Blanket cloth, Buckram などの織物が製造された<sup>9)</sup>。15 世紀初めに Cirencester の人々に付与された赦免令状には、手袋製造工、洋服仕立て商の他に John Greyndon, Thomas Brown, John Hardyng ら少なくとも 9 人の織布工が言及されていた<sup>10)</sup>。羊毛商人の John Tame は Edward IV 世の時代の Cirencester の織元の一人でもあり、大規模な織物工場を建設したと言われる。彼は Fairford で羊の大群を飼育し、その羊毛を Cirencester の工場で製品に仕上げるこ

とによって巨万の富を築いた。28枚のステンドグラスで飾られた美しい羊毛教会として知られる Fairford の St. Mary 教会は John Tame によって全面的に改築され、息子の Edmund によって完成された。John は妻 Alice とともに教会の北の小礼拝堂に埋葬され、その記念碑はこの教会を飾っている<sup>11)</sup>。

- 1) Ernest Watson, *The Minchinhampton Custumal and its Place in the Story of the Manor*, *Trans. of the Bristol and Gloucestershire Archaeological Society.*, p. 371, 1932
- 2) E. Power, *The Wool Trade in the Fifteenth Century*, in *Studies in English Trade in the Fifteenth Century*, p. 49
- 3) E. Watson, *op. cit.*, p. 323
- 4) E. M. Carus-Willson, *Evidences of industrial growth on Some Fifteenth-Century Manors*, *Eco. H. R.*, vol. XII, p. 195, 1959
- 5) *C. P. R.*, 1467-77, pp. 577, 581
- 6) V. C. H., *Gloucesters.*, vol. II, p. 157
- 7) *C. P. R.*, 1494-1509, p. 15
- 8) R. E. A. Fuller, *Medieval Cirencester*, *Trans. Bristol and Gloucestershire Archaeological Society*, vol. 54, p. 113, 1932
- 9) St. Clair Baddeley, *History of Cirencester*, p. 203
- 10) *C. P. R.*, 1413-1416, pp. 33, 34, 168, 169
- 11) R. Perry, *The Gloucestershire Woollen Industry, 1100-1690*, *Trans. Bristol and Gloucestershire Archaeological Society*, vol. 66, p. 61, 1945

## (五)

Edward III 世の治世の間における毛織物工業の急速な発展の時期に Wiltshire の毛織物工業も急速に拡大した。そして、Richard II 世の治世の間、イングランドの毛織物輸出量がほぼ 12,000 cloths から 36,000 cloths に 3 倍に増大した時期に Wiltshire は主要な毛織物製造地域としての地位を確立するに至った。

この14世紀後半から15世紀初めにかけての時期に Wiltshire の毛織物工業の中心的役割を担ったのは Salisbury であり、Salisbury の毛織物工業は15世紀を通じて際立っていた。その後、15世紀10年代から20年代にかけて Castle Combe など Wiltshire 西部における重要性が次第に増大し、15世紀後半には Trowbridge, Bradford, Westbury, Steeple Ashton, Devizes においても毛織物工業が発展した。

Salisbury は14世紀終りには毛織物の製造と販売の中心地としての重要性を増していた。1394年-5年の毛織物検査官の帳簿には Salisbury 及びその周辺の見出しのもとに 5,039 cloths があげられており、1395-6年には 6,749 に、1396-7年には 7,044 cloths に増大した<sup>1)</sup>。15世紀初めに Salisbury には William Waderove, William Pridy ら 80 名を越える親方織布工と 207 名の雇

い職人、George Joceら70名の親方縮絨工と30名の雇い職人がいた。Salisburyは毛織物生産の中心地となるべき立地を備えていた。豊富な水力、紡績・織布のための大量の人口、Cotswoldsの羊毛には及ばないが広大なSalisbury plainで育てられた上質羊毛が豊富にあった。ステイブラーズの会員で6回市長を勤めたJohn a'Porteは“A man of evil disposition and great malice”と記され、同じ会員の一人John Halleは市長に4回、そして国会議員にも選出された。彼ら羊毛商人たちは都市の最も富裕な階層を形成し、そのすべてが単に羊毛商人というよりはむしろ織元であり、羊毛を購入し、それを紡いで糸にさせ、そして織らせ、染色・仕上げさせた。こうした人々は‘clothmen’, ‘clothmakers’として記述された。15世紀後半、Southamptonの貿易の衰退に伴って、Salisbury商人による貿易は次第にLondon市場への依存を強めていった。こうして首都の後背地に組み込まれたSalisburyは、生産する毛織物の性質を変えるのを余儀なくされた。16世紀前半にはSomersetshireの広幅毛織物地域から少なくとも2人の織元が移住した。その1人はBathの市長Thomas Whelpeleyであった。

Castle Combeの毛織物生産は15世紀半ばに絶頂期を迎えた。その発展はCotswoldsから得られる原料羊毛、及び水力の利用と緊密に結びついていた。ここで毛織物製造に従事した最初の住人であるWilliam, ThomasらTouker家がcourt rollsに現れるのは14世紀半ばであった。1409年に地主となったNorfolk出自のSir John Fastolfは大量の毛織物を注文することによってその産業の拡大を刺激した<sup>2)</sup>。Bisley, Minchinhamptonなどから多くの人々が仕事を得るためにCastle Combeを訪れた。彼らは均一に割当てられた年2d.の人頭税capitation freeを支払ってマナーに留まることが許された。こうした人々のなかには、Minchinhamptonの縮絨工John BrentやBristolの縮絨工のもとで働いていた縮絨工John Burgessら多くの職人が含まれた。富裕な織元はこれらの職人を雇い入れた。縮絨工とも染色工とも記述されるAdam atte Hillは、1418年にはこうした職人を5名雇っていた。そして自らの縮絨水車を所有し、羊を飼育し、自己の敷地内で自身の毛織物ばかりでなく委託で他人の毛織物も縮絨・染色していた。マナー当局は張布場で織物を不正に伸ばすといった明らかな詐欺行為に対しては科料を課したが、毛織物製造の営業には全く干渉しなかった。こうした規制からの自由な環境にあって織布工、縮絨工らの職人や縮絨水車の数は増大した。1415年のWiltshireの毛織物検査官の帳簿には12人の他のCastle Combeの人々とともに織元のRobert Webbeや染色工のAdam atte Hillsらの名前が記載された。彼らは自ら、そして代理人を通じてその製品をLondonの毛織物市場Blackwell HallやBristolにもたらしていた。

SalisburyやCastle Combeの他、15世紀後半から毛織物工業が発展したSteeple Ashtonには著名な織元Robert LongやWalter Lucasがいた。TrowbridgeではEdward III世の治世には毛織物工業が活発に営まれ、15世紀初めにこの地域の染色済み毛織物はBristol市場を経て海外に輸出された。James TerumberはTrowbridgeの富裕な織元の一で、貧しい縮絨工から身を起し次第に大規模な企業家になった。15世紀半ばに彼はイタリア商人のために上質の未染色

毛織物を大量に製造していた。Westburyでも15世紀後半から毛織物工業が盛んになり、1433年に織元の William Gaweyn は或る King's Lynn の商人に £20 を貸していた。おそらく、Westbury の毛織物はイングランドの東部沿岸の港からドイツに輸出されていた。Edward IV 世の治世の初めまでに、この地域には一群の富裕な織元があり、原材料の購入から毛織物製造の全ての工程を管理しその製品を自ら London や Bristol, そして南岸の港にもたらした。

Somerset には毛織物製造に関わったと思われる多くの人々の遺書が存在する。Wells の John Tyler は、おそらく何人かの縮絨工と織布工を雇い、1512年の遺書でそれぞれに 4 d. づつを遺した織元であった。西部海岸沿いの Dunster の Thomas Upcot は、1504年に 4 bales の大青を娘の Joan に遺贈した。また、Publow の Agnes Perygrewe は染色小屋を所有し、'le fatte and furneyse' と共に John Peryn とその妻 Margaret にそれを譲り、Pensford と Publow の教会にそれぞれ 1 measure の大青を遺贈した。Somerset 南部の Ilminster の John Hawker は1496年に父親から染色用の炉と染色小屋を譲り受けた<sup>3)</sup>

また、この時期には織元、織布工、縮絨工などの毛織物生産に従事した人々をはじめ縮絨水車や布張場が州の各地に存在した。15世紀後半、Axbridge には John Hayne, Thomas Catchemay ら縮絨工がおり<sup>4)</sup>、Wiltshire との州境に位置する Mells には富裕な織元で、London 商人として知られた Sharland 家があり、その教会には Sharland 家の紋章が彫られていた。Bath には J. Leland が記した 3 名の著名な織元、Style, Kent, Chapman がいた。Bath は彼らによって繁栄がもたらされた。Mells の西に位置する Wells には有名な織元 Maugelyn 家があった。Wells の市民登録簿には、市民のなかに多くの毛織物業従事者が含まれた。14世紀末までに William Pedewell, Richard Pert ら 8 名の織布工、John Rose, William Vesye ら 8 名の縮絨工、Walter Baron, John Esmond ら 4 名の染色工、その他 10 名の洋服仕立て商が市民加入者の中にいた。15世紀前半には縮絨工、織布工、染色工はそれぞれ 22, 23, 6 名を数え、洋服仕立て商が 17 名いた。織元の William Sampton は 1428 年に市民の未亡人との結婚によって加入が認められた。そして、15世紀後半には縮絨工、織布工、染色工はそれぞれ 13, 25, 3 名、洋服仕立て商が 11 名いた<sup>5)</sup>。Wells 近傍の Croscombe も毛織物製造で繁栄しており、15世紀後半から16世紀前半に John Joyce, Roger Morryes, John Carter, John Bysse らの織元が、また Wells 南西の Glastonbury には Thomas Fysshier らの織元がいた<sup>6)</sup>。Devonshire に接する Chard では14世紀に縮絨水車を使用されており、'Bridgwater' 及び 'Taunton' と呼ばれる毛織物の、そしてまた粗質の cottons の取り引きを広範に行っていた。15世紀末に John Collys はその縮絨工であった<sup>7)</sup>。Taunton では、既に14世紀前半には毛織物製造業が確立されていた。Walter Danyell は縮絨水車 'Tokyng-Myll' を所有していた。14世紀末に縮絨工の John Broun がおり、East Stretch と Turkey Stretch には縮絨工らが毛織物を乾かす張布場があった。15世紀20年代には縮絨工の Thomas Corigge や Laurence Toker ら、そして織布工の Thomas Milton らが、70年代には縮絨工の Robert Bisshop, 織布工の John Fysshier が、そして世紀末には織布工の John Best, 染色工の

John Fancete, Robert Andrewson がいた<sup>8)</sup>。Taunton 近傍の Willington には 1 ないし 2 カ所、縮絨工らが毛織物を乾かす布張場 'Rack-closes' があった。また、Taunton の西の Wiveliscombe には Henry VI 世の治世に少なくとも 3 台の縮絨水車があり、住民に賃貸されていた。そして North 家, Chorley 家, Featherstone 家といった富裕な織元がいた。Bridgwater にも 15 世紀には多くの商人や絹物商, 洋服仕立て商の他に毛織物製造に関係した職人たちがいた。2・30 年代には縮絨工の Robert Paris, William Paris, John Parys, Robert Jervyse ら, 織布工の John Gone, John Gade, Richard Tregony, Thomas Scalover, John Whyte, 毛羽立て用カード製造工の John Wody らが, 40 年代には臨時税 Talage を納めた小教区民の中に Nicholas Tholler ら 8 名の縮絨工, John Hope ら 11 名の織布工, Richard Eade ら 4 名の染色工, John Davy ら 3 名の洋服仕立て商がいた。また, 15 世紀後半に Bridgwater は Bristol の慣習に従って Bordeaux の商人 Arnold Delestale と大青の保証契約を結んだ<sup>9)</sup>。

こうした記述は, 中世後半 Somerset 各地においてかなりの規模で毛織物生産が行われていたことを物語っている。Somerset では未染色の織物と赤, 紺, 青色などに染色された織物が製造された。それらの毛織物の多くは国内消費のため, そして南・中部ヨーロッパに輸出するために Bristol や Exeter に, そして他の州で製造された毛織物と同様に London の Blackwell Hall にもたらされた。

1) V. C. H., Wilts., vol. IV, p. 124

2) Carus-Wilson, op. cit., Eco. H. R., vol. XII, p. 198

3) F. W. Weaver, Somerset Medieval Wills, 1501-1530, vol. xix, pp. 64, 109, 159, 201, 203, 205, 209, Somerset Record Society, 1903, vol. xxi, pp. 207, 269, 354, S. R. S., 1905

4) C. P. R., 1476-85, pp. 437, 502

5) C. P. R., 1422-29, pp. 373, 365, J. Laland, Itinerary (ed. L. T. Smith), i, p. 127, 1907-1910, D. O. Shilton, R. Holworthy; Wells City Charters, vol. XLVI, pp. 124, ff, Somerset Record Society, 1932

6) C. P. R., 1467-77, pp. 45, 53

7) V. C. H., Somerset., vol. II, p. 415, C. P. R., 1485-94, p. 272

8) C. P. R., 1396-99, p. 128, F. W. Weaver, Somerset Medieval Wills, 1383-1500, vol. xvi, p. 71, S. R. S., 1901, C. P. R., 1422-29, pp. 310, 435, 1467-77, pp. 375, 436, 1494-1509, pp. 151, 330

9) T. B. Dilks, Bridgwater Borough Archives, 1400-1445, vol. 58, pp. 110, 118-120, S. R. S., 1945, T. B. Dilks, Bridgwater Borough Archives, 1445-1468, vol. 60, pp. 10-34, S. R. S., 1948, R. H. Dunning, T. D. Tremlett, Bridgwater Borough Archives, 1468-1485, vol. 70, pp. 11, 38, 50, 78, 239, S. R. S., 1971

## (六)

中世後半に毛織物生産の中心地に勃興した Gloucestershire, Wiltshire, Somersetshire などイングランド南西部の毛織物は, 北部の West Riding などの毛織物と同様に, 同じ時期に急



成長を遂げ、イングランド貿易の支配的地位を確立するに至った London に集中された。西部産の未仕上広幅織物の一部は西部で仕上げ、染色され消費されたが、大部分は London にもたらされ、その一部が London で仕上げ、染色されて国内市場へ、残りの大部分は未仕上げ、未染色のままアントワープに輸出された<sup>1)</sup>。London 商人は各地の農村工業と直結して毛織物を購入した。15世紀末には Bristol 周辺の毛織物を掌握し始め、Colchester 周辺の毛織物が London に送られ、Exeter 近郊の農村、あるいは市内において London 商人が未仕上白地カージ ker-sies を買い付けた<sup>2)</sup>。

‘Stroudwater’ の名が遍く知られるようになった Henry VII 世の治世以降、羊毛やチーズを積んだ荷車が往来していた Cirencester への、そしてそこから London への道路に沿って、毛織物市場の Blackwell Hall で販売するために毛織物を積んだ荷車が行き交った。

15世紀末、Wiltshire の毛織物はますます London に向けられるようになった。そこでの需要は未染色広幅織物であった。Wiltshire 西部、とりわけ Bradford, Trowbridge, Devizes 周辺の地域は以前から未染色広幅織物で有名であった。それらは、時に織元自身によって、またはその代理人によって、または多くの運送人の一人に委託されて London に運ばれ国内・外の商人に販売された。14世紀70年代には確かに Salisbury の毛織物が London の店舗で販売されていたし、Trowbridge の織元 John Wyke は London でイタリア商人に £100 にのぼる 20 cloths の毛織物を販売し<sup>3)</sup>、Devizes の織元 William Page は、16世紀初めに London で大量の未染色広幅織物を販売した<sup>4)</sup>。また、Westbury の織元 William Athelam は1459年にドイツ商人に £99 にのぼる上質毛織物 26 cloths を長期信用で販売した。

Somersetshire の毛織物も London に向けられた。15世紀 8・90年代に Bath の織元 Robert Baten は 28 cloths の未染色毛織物を届けることを条件に London の絹物商 William Smyth に 100Li の借金をした<sup>5)</sup>。Wells や Taunton も London との繋りを持っていた。1472年に Wells の小売り商 Thomas Nabbe は London 市民で絹物商の Thomas Nyche に 108s. の負債があった。また、Taunton の織布工 John Best は15世紀末に London 市民で洋服仕立て商の Hugh Acton に 10marks の借金があった<sup>6)</sup>。Bridgewater は Bristol と緊密な繋がりを持っていたが、London とも深い関係があった。15世紀、John Warde と Thomas Brasyne は London 市民で絹物商の John More に借金があったし、John Kendale, John Hyll は絹物商の Henry Colet, William Shore, 商人の Laurence Basset, 皮革商の Thomas Oulegreve らと取引があった<sup>7)</sup>。

かくて中世後半、イングランドの毛織物貿易への転換とその後の拡大においてイングランド南西部諸州が極めて大きな役割を担ったことは紛れもない事実であった。

1) G. D. Ramsay, *The Wiltshire Woollen Industry in the Sixteen and Seventeenth Centuries*, 2nd ed., p. 23 f, London, 1965

2) 例えばイングランド北部については、H. Heaton, *The Yorkshire Woollen and Worsted Industries*,

Oxford, 1920

3) V. C. H., Wilts. pp. 134-6

4) V. C. H., Wilts. p. 139

5) C. C. R., 1485-1500, p. 305, C. P. R., 1485-94, p. 247

6) C. P. R., 1391-96, pp. 302, 679, C. P. R., 1494-1509, p. 151

7) C. P. R., 1391-96, pp. 544, 673, Bridgwater Borough Archives, 1400-45, vol. 58, pp. 2, 137, 150, 1445-68, p. 41, 84-88, 134, 1468-85, vol. 70, pp. 3, 20, 21, 28, C. P. R., 1467-77, p. 320

附記：本論文執筆中に本学生活学科・友松滋夫教授御急逝の報に接した。教授には筆者が本学に赴任以来30年近くの間、公私にわたりひとかたならぬ御指導・御鞭撻を頂いた。またイギリス留学中は心優しいお気遣いを頂いた。謹んで御冥福をお祈りし、拙著を今は亡き教授に捧げたい。